

日本英語教育史学会 会報

316

2023 年 8 月 17 日

HiSELT *Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan*

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 田邊祐司)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562
県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室
tel: 0824-74-1727 fax: 0824-74-0191
e-mail: membership@hiset.jp

会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)

ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873

ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873

学会公式ウェブサイト www.hiset.jp

第293回研究例会報告

2023 (令和 5) 年 7 月 15 日 (土), 第 293 回研究例会が Zoom を用いたオンラインの形態により開催されました。参加者は 47 名でした。

例会では 2 本の発表が行われました。はじめの「自著を語る」では、指定討論者に江利川春雄氏 (和歌山大学名誉教授) を迎え、著者の柁木貴之氏 (北海学園大学) が『国語教育と英語教育をつなぐ: 「連携」の歴史, 方法, 実践』(東京大学出版, 2023 年 1 月) についてお話しされました。続くミニ・シンポジウム「英語教育における『ローマ字』を考える—通時的・共時的な視点から」では、話題提供者として河村和也氏 (県立広島大学), 久保野雅史氏 (神奈川大学), 拝田清氏 (和洋女子大学), 堀由紀氏 (和洋女子大学大学院生) が発表を行いました。司会は上野舞斗氏 (四天王寺大学) でした。以下に出席者の感想を掲載しますのでご参照ください。(①は柁木氏及び江利川氏, ②は河村氏, 久保野氏, 拝田氏, 堀氏の発表への感想, ③は会全体に対する感想です。)



<発表 1 の感想>

- ◆①歴史に関する会ということだが、言語間の相違もかなり詳しく指摘していて面白かった。(岩橋一樹)
- ◆①柁木先生, ありがとうございます。同じ言語を扱う国語教育と英語教育の連携について大変興味深くお話を伺いました。両者の連携が大切なことは、日頃運営する生徒をみても本当にそうだと思います。先生の今後のご研究もぜひまたお話をお聞かせください。(堀由紀)
- ◆①英語指導をしている中で、同じ言語指導でも国語教育との役割が明確に違うこと、また英語教育を通して国語科の教育へと繋げているということを学びました。英語教育の意味を改めて考え直しながら、国語科教員とも対話を続けてより良い指導を目指していきたいと思います。(佐野悟一)
- ◆①「5. 考察 5. 2 「連携」の課題③「気づく」だけで終わり、「読解が深まる」等の要素がないと、「連携」の有用感を得られない可能性がある。」に関して、外国語の授業 (5 年生) の中でローマ字表記のしくみ (子音+母音) に気づくような活動をただで「読解が深まる」のような要素がなくても十分に「連携」の有用感を「子ども自身が」得られたことがあります。

曖昧にしか(またはほとんど)理解(習得)していなかったローマ字表記の知識が、本人自身のなるほど!感を伴う気づきによってその後の英語の音韻認識力の育成につながっていったという事例がありました。子どもの認知(レベルに応じた)活動を組むことで、気づきを引き出すことの大切さを思います。(行岡七重 [小学校外国語教育指導協力員])

◆①連携の歴史や方法等、大変興味深く拝聴させていただきました。先生のご説明、ご提示していただいた資料、全てわかりやすく、大変勉強になりました。ありがとうございました。

(山崎千春)

◆①国語教育と英語教育の「連携」と言う時にその「連携」をどのように捉えるかにもよりますが、もう少し緩やかに「接点」くらいに考えると、例えば保科孝一の W. Viëtor への関心、垣内松三(『国語教育の諸問題』)の Ogden による Basic English の理解、外国人に対する日本語教育の観点ながら土居光知の「基礎日本語」なども思い起こされるところです。〈Dragon〉

◆①わかりやすかったです。様々な文献を見せていただけたので、今に至るまでの経緯が理解できました。やはり教科書から文学作品やストーリーが減っているのは良くないと思います。

(乾まどか)

◆①大変明確なご発表で分かりやすかったです。そのタイトルのとおり、国語教育と英語教育の連携を特に歴史的な側面から根拠を示しつつ詳細にまとめてくださっており、理解を深めることができました。江利川先生との指定討論もすべて興味深いものでしたが、特に最後の小学校での連携については、私自身が小学校に所属していることもあり、江利川先生ご指摘のように中等教育と違って教科間のへだたりが少ない(=連携のハードルがより低い)ことから、今後広く「言語教育」としてとらえ実践する可能性や必要性を感じています。今後のご研究が小学校教育での実践にまで広がっていくことを期待しています。ありがとうございました。(上地沙矢)

◆①両科目連携の歴史から現代の教育に関わる実践的なお話まで、幅広い内容をとても明快かつコンパクトにまとめてくださり、とても学びの多いご発表でした。(ポレポレ)

<発表2の感想>

◆②今の日本で使われるローマ字でもかなり表記の揺れが大きいことがわかった。(岩橋一樹)

◆②本日は拙い話でしたが機会をいただきましてありがとうございました。河村先生、久保野先生、拝田先生のお話に共感するところが多くありました。また、ぜひこのような議論の場があると嬉しいです。(堀由紀)

◆②自分自身が小学生だった際に中途半端にローマ字を学んでしまい、かつパソコン入力に慣れてしまったことで英語学習に馴染むまでに時間がかかってしまった経験がありました。大学在籍時の論文でも扱ったテーマだったため、ローマ字について深く議論されている場があったことに感動しております。これからも英語教育に携わりながら、国語科の方と連携をとって指導に励みたいと思います。(佐野悟一)

◆②私は「支援員」ですので、学校の中で「国語科」と「外国語活動・外国語科」の先生同士を連携できる立場にあります。(自分で言うのも何なのですが非常に貴重な存在だと思います。)たとえそれがお一人の(同一人物の)中でのことであっても、多くの当事者の先生方は、それらを連携させる術についてあまりご存じでないように見えます。(知り得る機会が乏しいのだと思います。)

具体的には、例えば4年生の3学期、書写で書き初めが終わった頃には時間がありますので、そこで3年生の時に不十分だったローマ字表記について復習を行い、次の5年生外国語科で必要になるローマ字表記(自分の名前や日本語の語彙(日本紹介の単元で要る)など)へ連携させることが可能だったり、上の欄(発表1の感想)にも少し書きましたが、活動の組み方次第で、一見ローマ字表記の学習のようでも、同時に英語の音韻認識力を育むことに寄与できるやり方もあったりします。

最後に河村先生が仰った、ローマ字(アルファベット文字)の書字学習をもっと系統立ててしっかりと行っていくことも非常に大切なことだと、子どもたちの様子を見ていて心底そう思います。(行岡七重 [小学校外国語教育指導協力員])

◆②継続して取り上げていただきたいテーマです。河村氏の視座は流石だと思いました。

(tmrowing)

◆②お三方の先生の、各視点でのお話は大変興味深かったです。これまで知らなかったこと、気づかなかったこと、考えもしなかった内容があり、日本人とローマ字の関係がこれほど面白く複雑だということに驚きました。(山崎千春)

◆②ローマ字政策をめぐる各提案者のお考えを伺いましたが、「英語教育における」との観点はやや稀薄なように思われ残念に思いました。例えば、英語(外国語)教育が中学校1年次より開始されていた時代に、小学校でローマ字を学ぶことが中学校での英語学習にプラスとなったのかマイナスになったのか、また、小学校に英語・外国語が入るようになった現在ではこの点でなにがしかの変化がみられるのかなどの調査結果があれば、そういうものをご紹介いただくと関心も高まったかと思えます。田邊会長がご紹介になられたデータが公開されていると面白いのだがと思ったところです。(Dragon)

◆②面白かったです。(乾まどか)

◆②「ローマ字」の歴史的変遷を概説頂き、同時にローマ字の扱われ方の現状をあらためて多角的に知ることができました。英語教育に携わる身ではありますが、シンポジウムの中で語られていましたように、自分自身も正しく理解していないことが多く、目的も歴史的背景も曖昧なままに何となく使っている...まさにこのような状況だと痛感しました。これは現場の教員の多くが同じような状況なのではないかなと感じます。まずは正しい知識を得ること、その上でローマ字をどう考えて使っていくのか、しっかりと考えるべきだと思いました。ありがとうございました。(上地沙矢)

◆②ローマ字教育や学習の機会が教育課程でますます減ってきているような印象を受けるのは、やはりメディア媒体の発達によって、課程外においてローマ字に触れる機会がますます増えたからではないかと思いました。しかし、そこで出会うローマ字表記が必ずしも適切に表記されていないという現状が、今回の問題をさらに複雑化し、根深いものとしてしまっているような気がいたしました。(ポレポレ)

<会全体に関する感想>

◆③ありがとうございました。(堀由紀)

◆③教育史について日々の業務の中では学ぶことがなく、大学を卒業して以後、自分の中に学びを取り入れる機会が減っていました。今回改めて学ぶことの楽しさを実感することができま

した。(佐野悟一)

◆③ご開催、誠に有難うございました。アカデミックな内容で少し敷居が高かったのですが、思い切って参加させていただいて本当に勉強になりました。ご提供いただきました貴重な資料を拝読して引き続き勉強させていただきたいと思います。

(行岡七重 [小学校外国語教育指導協力員])

◆③江利川先生の Facebook でこの大会を知り、参加しました。江利川先生の厳密な指摘、また他の先生方の研究にたくさんの刺激を頂きました。ありがとうございました。<乾まどか>

◆③英語教育史はまだ学び始めたばかりなのですが、歴史から学ぶこと、それを念頭において現在の自分の実践に活かしていく必要があることを強く感じています。今後もよろしく願いいたします。(上地沙矢)

発表を終えて

柁木 貴之 (北海学園大学)

7月例会では「自著を語る」機会を与えてくださり、誠にありがとうございました。指定討論者を務めてくださった江利川春雄先生に心よりお礼申し上げます。

討論で最も勉強になったのは、岡倉由三郎は1900年代にも「連携」の提言を行っている、というご指摘です。例会後、すぐにご教示いただいた資料、

・岡倉由三郎 (1907) 「外国語教授法」(『教育大辞書 第一分冊』)

を手に入れました。すると、たしかに「外国語科と他学科との関係」という見出しがあって驚きました。とくに「殊に文法上の述語や区分法などは、十分これ等の受持教師の間にて打合せをなして」という記述は、

・石橋幸太郎 (1936) 「文法教授の一障害」(『言語問題』第2巻第9号)

・石橋幸太郎 (1938) 「英文法教授の実際」(『中等教育研究』第7巻第1号)

につながる内容と感じました。

これからさらに勉強をして、岡倉と石橋について論文をまとめたいと思います。指定討論者の江利川先生にあらためて感謝いたします。また当日は上野舞斗先生が司会を務めてくださったおかげで、安心してプレゼンが出来ました。上野先生とはこれからともに切磋琢磨して、一緒に学会を支えていきたいと思っています。

また皆様にお目にかかる機会を楽しみにしております。

発表を終えて

江利川 春雄 (和歌山大学名誉教授)

指定討論者のご指名を快諾後、恵贈いただいたご著書を読んで驚愕。質量ともに卓越しています。打者の柁木選手は大谷なみ。質問を投球する私も本気モードになりました。投げたのは6球。英語教育史学会の観衆を意識し、「第2章『連携』に向けた議論の歴史」にコースを絞りました。

1. 連携の目標＝メタ言語能力(言語意識, ことばへの気づき)の育成に関して、柁木氏は大津由紀雄氏をどう乗り越えたのでしょうか。
2. 岡倉由三郎の国語-英語「連絡」論は「外国語教授新論」(1894)から進化していないのでしょうか。

うか。(47頁)

3. 国語教育と英語教育との「相補的關係」論は1960年代からでしょうか。(94頁・103頁)
4. 「言語意識」の登場は1940年代からでしょうか。(61頁・82頁)
5. 2000年代から「連携」が実践されるようになった要因はなんでしょうか。(2頁～)
6. 小学校での連携(連絡)について今後研究を進める見通しはあるのでしょうか。(379頁～)
6球のうち4球も打ち返されました。打率6割6分6厘。柗木選手、恐るべし。

「ミニ・シンポジウムを終えて」

拝田清 (和洋女子大学)

話題提供者として今回、ラテン・アルファベットが日本に入ってきたとされる時期と、その後、ローマ字表記としてのヘボン式、日本式、そして訓令式が成立した経緯を駆け足で報告させていただきました。拙い報告でしたが、ローマ字を学習する側としての児童の負担や混乱に関する議論はほぼなされていないこと、そして、内閣訓令が出されて以降、すでに70年が過ぎようとしています、未だ改訂がなされていないことなど問題として提起させて頂きましたが、議論の場となってきた国語審議会は安田敏朗(2007)によれば「迷走の60年」を過ごしてきたと指摘されています。それだけ一筋縄ではいかない問題であるということですが、裏を返せば、それゆえにこそ、このテーマは本学会でも継続して取り扱っていくべきテーマであると考えております。

「ミニ・シンポジウムを終えて」

堀由紀 (和洋女子大学大学院生)

この度はミニ・シンポジウムで話題提供の機会を与えてくださり、心より感謝申し上げます。また、ご一緒させて頂いた先生方の話題提供も大変興味深く拝聴させていただきました。私からは、国語科と外国語活動・外国語科におけるローマ字教育の現状についてのお話をさせていただきました。国語科でのローマ字指導の指導時間と指導内容について、そして、外国語活動・外国語科の文字指導の現状についてを教科書会社の年間指導計画の調査結果から報告いたしました。また、中学校1年生の前期中間テストでもヘボン式ローマ字を扱う問題が出題されている実態もお伝えさせていただきました。発表後にご質問をいただきました征木先生に心より感謝申し上げます。また、江利川先生からいただいたご意見についても引き続き調査を続け、国語科と外国語活動・外国語科におけるローマ字指導の連携について研究を続けてまいります。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

「ミニ・シンポジウムを終えて」

久保野雅史 (神奈川大学)

従来は小学校4年生で行われたローマ字が、3年生に前倒しされて20年以上になります。前倒しされた理由は、コンピュータのキーボード入力をローマ字で行うためだと言われています。ところが「簡単な単語について、ローマ字表記されたものを読み、また、ローマ字で書くこと」という学習指導要領の記述を3年生が達成することは容易ではありません。キーボード入力では「大通

り」(おおどおり) は, oodoori と打ち込みますが, これは訓令式ローマ字とは大きく異なります。大文字と小文字の学習順序についても, 文字の識別の容易さという点では, 先に大文字を学び, それから小文字に移行する方が無理がないかも知れません。こういった点などを, 引き続き検討していきたいと考えています。

「ミニ・シンポジウムを終えて」

河村和也 (県立広島大学)

日本式ローマ字が体系的で規範性が高い一方, ヘボン式ローマ字は主に習慣によるものであり, それぞれの使用者の意識にも大きな差があるという指摘は, 昭和で言えば 20 年代にすでになされていました。ローマ字の現在を俯瞰すると, ヘボン式と称して用いられている表記の中には不完全なものが多く, 特に長音・促音・撥音を表す際に不都合が生じていることがわかります。また, 日本式でもヘボン式でもない奇妙な綴りが広く用いられている状況も明らかになってきます。ローマ字はラテン文字を用いて日本語を表記するための体系なので, 漢字やカタカナやひらがなを用いる表記体系と同様に大切にされるべきだと思います。すべての言語はラテン文字を用いて表記する権利があるとわたしは考えています。

>> 事務局より

>> 事務局の「夏休み」について

事務局の業務は平日のみとしておりますが, 8 月 28 日 (月) より 9 月 8 日 (金) までは遅い「夏休み」をいただき, 電子メールへの対応のみとさせていただきます。この間に郵便・電話 (留守番電話への吹き込み)・ファクシミリ等をお寄せくださった方へのお返事は 9 月 11 日 (月) 以降となりますが, どうぞご了承ください。

>> この先の研究例会・全国大会

- | | | |
|---------------|----------------------|---------|
| ◆ 第 294 回研究例会 | 2023 年 9 月 16 日 (土) | オンライン開催 |
| ◆ 第 295 回研究例会 | 2023 年 11 月 18 日 (土) | 検討中 |
| ◆ 第 296 回研究例会 | 2024 年 1 月 20 日 (土) | 検討中 |
| ◆ 第 297 回研究例会 | 2024 年 3 月 16 日 (土) | 検討中 |

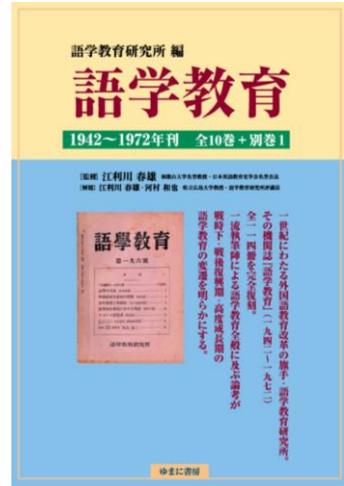
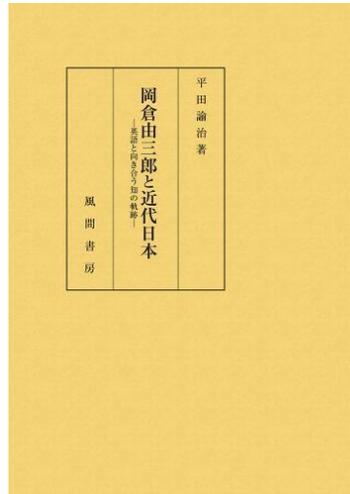
→日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は, (1) 発表希望月, (2) タイトル, (3) 発表概要 (100~200 字程度), (4) 使用予定機器, の 4 点を明記の上, 発表希望月の 3 ヶ月前の 10 日 (1 月発表希望であれば 10 月 10 日) までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

》 英語教育史フォルダ

- ◆ 神山 孝夫 (著) 『市河三喜伝—英語に生きた男の出自、経歴、業績、人生』が研究社より 7 月に刊行された。定価は 13,000 円 (税別)。
- ◆ 平田 諭治 (著) 『岡倉由三郎と近代日本: 英語と向き合う知の軌跡』が風間書房より 3 月に刊行された。定価は 11,000 円 (税別)。
- ◆ 語学教育研究所 (編) 『語学教育 1942~1972 年刊 第 3 回配本 別巻 総目次/総索引/解題』がゆまに書房から 7 月に復刻された。定価は 12,000 円 (税別)。



『日本英語教育史研究』第 39 号 投稿論文の募集

2023 年 5 月に刊行予定の研究紀要『日本英語教育史研究』第 39 号への投稿論文を募集します。投稿締切は 9 月 30 日 (土) 23:59 JST です。投稿規程・標準書式に沿ってご投稿ください。

投稿先・問合せ先 (紀要編集委員会) kiyo@hiset.jp

日本英語教育史学会 第 294 回 研究例会

日 時 : 2023 年 9 月 16 日 (土) 14:00~17:00
オンライン開催

研究発表

明治期英語教科書独習書の文法と訳読法 :
林十次郎の独案内と直訳を例に

馬本 勉 氏 (県立広島大学)

【発表者から】

明治期の舶来英語教科書に対し、学習者向け独習書が多数出版されたことが知られている。それらは英語原文の有無によって独案内と直訳とに大別され、音読と訳読を手引きする記号には著者（訳者）毎の工夫も見て取れる。今回は、ニューナショナル、ロングマン、ローヤル読本の独習書を手掛けた林十次郎（広島県士族）に注目する。他の著者との比較により、林によって施された文法・訳読に関する手引きの特徴に迫りたい。

研究発表

高校入試英語スピーキングテスト導入をめぐる教育制度・行政上の諸問題

久保野 雅史 氏（神奈川大学）

広川 由子 氏（千葉県立保健医療大学）

【発表者から】

ESAT-J について、全国大会（2023 年 5 月）では①導入の経緯、②実施体制の脆弱性、③テストとしての質について指摘した。9 月の研究例会では、④IRT を使用する目的、⑤本試験と追試験の等化方法、⑥受験者へのフィードバック情報の内容、⑦志望校選択への影響、⑧不受験者の扱いなど、制度的な破綻について明らかにしていきたい。（久保野）

【発表者から】

報告者は ESAT-J を法的な見地から問題にする。東京都教育委員会（都教委）は瑕疵のある ESAT-J を 2023 年度も実施し、各中学校に出願の際に ESAT-J の結果を都立高等学校へ提出させる計画である。しかしそもそも都教委にこのような権限はあるのだろうか。結論として現代教育法制に照らし都教委がこうした権限を有していないことを指摘するとともに、2023 年度まで ESAT-J を運営するベネッセコーポレーションが次期事業に応募せず、次期事業者として英国のブリティッシュ・カウンシルが選定されたことを踏まえ、ESAT-J の将来像に言及する。（広川）

参加費： 無料

問合せ： 日本英語教育史学会例会担当 (reikai@hiset.jp)

EDITOR'S BOX 先月の例会が開催された日、秋田では平年の 1 ヶ月分に相当する量の雨が降っていました。／お昼頃に秋田市の中心部を流れる太平川が氾濫したという情報が入り、その後間もなく避難指示（最初はレベル 4、後にレベル 5 に）が市内の多くの地域に出され、私も家族と近くの避難所に向かいました。／駐車場はすでに車で埋まっており、小さい子どももいることから避難所での滞在を断念し、食べ物の買い出しをして家に戻りました。／出発時にはそれほどでもなかった近くの道路が、わずか数十分後には水で覆われていることに驚きました。この状態が 4 日間の大雨の予報の初日で起きることは全く頭にありませんでした。／その後夕方に近くの川でダムが決壊を防ぐための緊急放流が行われ、夜中に市の中心部でその川の歩道の一部が崩落したり、台所や洗面台の排水溝が大きな音を立てたりしていましたが、この時に感じた不安と恐怖は忘れることができません。／今回の大雨による被害は秋田の歴史に刻まれることになると思います。このことが将来の教訓として生かされることを願うばかりです。／猛暑に加えて台風も頻発し、落ち着かない日々が続きますが、みなさまもどうかご自愛下さいませよう。（若）